



「にをいがけ名簿」 リニューアル

3月大教会教会長会議
立教186年3月22日
大教会長 片山幹太

本島通信

発行所 〒763-0223 香川県丸亀市本島町泊 268
天理教本島大教会
電話 0877-27-3321 (代)
本島通信編集室 R230323-0327-15
奈良県天理市指柳町 270-1
本島話所 〒632-0093
電話 0743-63-1571 (呼)
<https://www.honjima.com>
Email: webmaster@honjima.com
大教会 朝夕おつとめ時間
【4月1日～4月15日】
朝づとめ 午前6時30分
夕づとめ 午後6時45分
【4月16日～4月30日】
朝づとめ 午前6時30分
夕づとめ 午後7時00分

今日は大教会祭典の同時期、アメリカではWBC決勝戦が行われていました。日本とアメリカの対戦は歴史に残る名勝負で、大いに盛り上がったようです。大教会の祭典も勇んで勤めさせて頂くことができました。ありがとうございます。

この後、布教部から報告がありますが、このたび「にをいがけ名簿」と「おさづけ取次報告」をリニューアルすることにいたしました。

よう、ほくの使命は、教祖の道具衆として、陽気ぐらし世界実現に向かつてたすけ一条の御用に勤めさせて頂くことにあります。

そのために私たちの先人先輩方は、常日頃からにをいがけを心掛け、いざというときのおたすけに取りかかれるように「にをいがけ名簿」を作られています。今日まで続いてきたと認識しています。

このたびリニューアルということ

ですが、内容が変わることではありません。報告用紙が少し大きくなることや、報告の手段が新たに増えることぐらいです。

同時に、「にをいがけ名簿」の定義を新たに設定させて頂きました。

一つは、自分が天理教を信仰していること、教祖の教えを信仰していることを相手に明らかにし、何かしらの反応があった相手のお名前です。

もう一つは、お道のお話を伝えたい、お道に誘いたくても、なかなかタイミングや勇気がない知人のお名前です。大教会のお願いづとめを通して理を頂いて、にをいがけを実行するということです。

にをいがけさせて頂きたい思いと、親神様のお働きと、この二つが一つになって人を導かせて頂くことができると思っています。

教祖年祭活動の踏み出しに当たって、本島が一つになって、よう、ほくの自覚を高めて行きたいと思っています。

外に向かつてのにをいがけに合わせ、先人先輩はおちばへの伏せ込みにも努められました。

今日の西先生のお話(縦の伝道講習会)でも、親里の真南棟の南側に

立つ大きな門柱が私たち本島の先人が90余年前に運ばれた真実であることを教えていただきました。

そこでこの年祭活動でも、おちばへの伏せ込みのきしんを積極的に意識して勤めさせて頂きたいと考えています。

最後にもう一点。西先生のお話の中で、大いに共感したことは、信仰の喜びを子供に伝えるということですね。照れくさかったり、身近になればなるほど言い難かったりしますが、タイミングを見極めて機を逃さぬように、信仰の有り難さや喜び、感謝を伝えることが、子供達が闇路にさまようことのない結果に結びつけて頂けるように思います。

以上です。ありがとうございます。

(文責・本島通信編集室)



ミロバランスモモの花(3月22日撮影)

少年会縦の伝道講習会 (要旨)

立教186年3月22日 【本島大教会】

優しい心で お道の子どもを育てよう

少年会本部委員 西正一郎先生
にし しょういちろう 先生

この3年、コロナ禍により世の中だけでなく、お道全体も大きな影響を受けました。

少年会活動も例外ではありません。総会、おとまり会、こども会、鼓笛活動など、いずれもやむなく中止をされたり、縮小して、あるいは形を変えて実施されたというところも多々あります。



以前、この節を受けて、内統領の宮森与一郎先生が次のような内容のお話をされました。

「今回の節から、これまで気づけなかったことに気づかせてもらい、一人ひとりの感覚を優しくさへと変えていければ、そして、優しい心を伝える努力を心がければ、あとは神様が補ってくださる。『これしかできない』ではなく、『これができる』と今できることを喜ぶのがお道の考え方ではないか。」(みちのとも立教183年6月号) という内容でした。

これは今から3年前にお話くださったことですが、この考え方は今も変わることはないでしょう。

教祖140年祭に向かう今、少年会活動にも力を入れることで、節から芽を吹くご守護をお見せいただきたい

と思うのです。

おやさとかた真南棟の4階に少年会本部の事務所はございます。そして下の3階に一れつ会がございませう。真南棟から外を眺めますと、北側には神殿を拝すことができます。南を見ますと、右手に天理高校、左手に天理大学の体育館が見えます。その交差点の両脇に非常に大きな石柱が立っているのをご存知でしょうか。

私は昔から、この立派な柱は誰がなんのために建てたのだろうと思っております。

ある記事にこう書かれていました。「1932(昭和7年)年の昭和天皇の行幸にあたり、天理外国語学校(現在の天理大学)の校門柱として建柱されたもので、岩井尊人意匠の十二辯型胡麻殻式圓柱。越乃國部内の本島分教会より青木石の献納を得て、9月4日より基礎工事に着手し、26日竣工を見るに至る」とありました。本島大教会ホームページには、昭和6年頃からのいわゆる昭和普請に際して、石材一切を献納したときの写真が載っています。そこには、「片山好造2代会長が旗を振り、塩飽広

島の心経山より青木石が切り出され、おちばにおいて『礎石献納石曳き団参』を行った」と記されています。

真南棟前の門柱も時期的にも同じ頃、同じ石と思われるます。

今に残る石一つ、柱一本にも歴史があり、先人の思いが込められています。私は今回、ここからあの石が運ばれ、まさに本島の先人の方々が、今の本部神殿や教祖殿の礎を築かれたのだと感じ入ったのです。

そこで次に、少年会の礎、元の部分に少し触れたいと思います。

少年会活動は「縦の伝道」であると言われますが、これについては二代真柱様が、少年会設立当初にこのように言っておられます。

「よのもと会は、横の布教の上をしっかり手をつなぎ合って頂きたい。一れつ会なり、少年会なりは、縦の伝道の上をしっかり、杖となり柱となって頂きたい。そして各自親達は、自分の乳をふくました子供に、乳と一緒に自分の喜びを注ぎ与えてやって頂きたい」(昭和42年年頭会議)

と仰られ、さらに、「皆さん方の中には、親の信仰に

反対しないまでも、ついて来ない子供をお持ちの方があるだろうと思ひます。世界へ出てしまつて帰つて来られなくなつた子供をお持ちの方もあるだろう。長男だから教会に世話する、次男だから勝手にしろというような、冷飯扱ひされた時代もあつたと思ひます。しかしながら、幾人子供を与えてただこうと、親の喜びを子供に伝えること、それは最も肝心なことでありながら、難しいこととされている。しかし難しいからと放つておくわけにはいきません。

(中略)横の布教の忙しさにまぎれて、縦の伝道を怠つていなかつたか。子から孫へ伝わる血の流れのように、親の喜びは子供の喜びであり、子供の喜びは孫の喜びであるというように、この道が続いておつてこそ道と言えらると思ひたい(昭和42年年頭談話 要旨)

と述べられたのです。

親子でも、夫婦でも、兄弟でもその心は銘々違つたと教えられる。信仰は一名一人と言われるゆえんです。ですから、信仰者の子は皆、自然と道の信仰者になるかという、本来はそうあつてほしいですが、必ずしもそうではありません。ましてや、よふばく信者家庭のお子さん、さらにはそのお孫さんとなると、なおさらだと思ひます。

論達第四号に、

「その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである」

と力強く述べられています。

「縦の伝道」とは、親から子へ、子から孫へ確実に信仰の喜びを伝えるということに他なりません。それは布教と同じくらい大切なことであると教えられるわけです。

しかしながら、「昔は少年会活動もよくやつていたけれど、もう周りを見ても子供がいらないですよ。」という声もよく聞きます。

私の妻は秋田出身です。全国でも人口減少率トップクラスの県で歯止めがかかる様子はありません。今年ももっと減るといふ予測もあります。

本当に大変な時代になつたと思ひます。だからこそ、今いる子どもたち、そしてこれから生まれてくる子供たちを大切にしなければならぬと思ふのです。放つておくことはで

きません。

ではどのように信仰を間違ひなく伝えればいいのか。

稿本天理教教祖伝逸話篇一一七「父母に連れられて」を拝読します。

明治十五、六年頃のこと。梅谷四郎兵衛が、当時五、六才の梅次郎を連れて、お屋敷へ帰らせて頂いたところ、梅次郎は、赤衣を召された教祖にお目にかかつて、当時煙草屋の看板に描いていた姫達摩を思い出したものか、「達摩はん、達摩はん。」と言つた。それに恐縮した四郎兵衛は、次にお屋敷へ帰らせて頂く時、梅次郎を同伴しなかつたところ、教祖は、

「梅次郎さんは、どうしました。道切れるで。」と、仰せられた。

このお言葉を頂いてから、梅次郎は、毎度、父母に連れられて、心楽しくお屋敷へ帰らせて頂いたという。とございます。

この時の梅谷先生の気持ちには、子を持つ親であれば痛いほど分かります。ところが教祖はそんなことは少し

も気になさりませんでした。それどころか子供を連れてこない道が切れるとお仕込み下さつたわけです。

この逸話からは、教祖の子供を可愛がる大きな親心を感じるとともに、この道を伝える上で、どんなときもしっかりと子供の手を引いて共に道を通る、親の姿勢の大切さを説かれている気がします。

おさしづに、

「もう道というは、小さい時から心写さにやならん。」明治38年11月16日

と、ありますが、小さな頃に身に付けたものは、一生の土台となります。ですから教えを伝えるという信念を持つて、子供に接するということが、信仰を伝える上での大切な点ではないかと思ふわけです。

もう一つ、信仰心を育むという上においては、なぜ信仰をしているのか、つまり、信仰の元を忘れないことが大切だということはよくよく言われていることでもあります。

ここにおられる方はそのほとんどが代を重ねた信仰をお持ちだと思ひます。

しかしながら、おさしづにも

「神の自由して見せても、その時だけは覚えて居る。なれど、一日経つ、

十日経つ、三十日経てば、ころつと忘れて了う。(明治31年5月9日)とあります。

元一日を忘れないよう、節目ごとに確認を通して通る、これが大切であると思います。

私は現在、災害救援ひのきしん隊本部の主事という立場もごさいます。災害隊員として初めて災害に関わったのが、ちょうど12年前の東日本大震災でした。

このときは日本の全教区隊から、さらには台湾からも出動がありました。先生方の中にも被災地に赴かれた方もおられることと思います。それから多くの災害の現場に携わって参りました。

そうした災害を通して、私はいつも家のいんねんについて考えさせていただきます。

私は信仰4代目ですが、入信のきっかけは、明治20年、初代である曾祖父の姉婿の身上からで、初代はそのとき16歳でした。

当時初代が暮らしていた紀州の市木村、今の三重県南部を、後に南海大教会二代会長となる畑林為七という方がおたすけに回られていた。それこそどんな身上もたすかると評

判であったので、姉婿のおたすけをお願いしたのでしよう。

そのおたすけは、床の間に灯明を上げ、「南無天理王命、南無天理王命」と神名を唱えて拜むものであったそうです。ところがお願いが終わると姉婿の容態が急変し、三日目に出直しました。一同はたすかと思つていたのでから驚いたでしょうが、「これは並たいていの事やない」と考えぬいた結果、一家そろつて信仰をすることにしようと伝わるのが、わが家の信仰の始まりです。

そして4年後、明治24年、東海地方で濃尾地震という大地震が起こります。当時の南海支教会より復興ひのきしんのために有志が派遣されることとなり、その中に20歳の曾祖父もいました。

派遣された人たちは、救援ひのきしんとともにこの教えを広めようと向かったと思えますが、尾張地方は仏教王国と言われた土地柄故、なかなか道はつきません。当時、「美濃・尾張の国は、身の終わりにならないと道はつかない」と言われるくらい困難であったということですが、

次第に一人帰り、二人降りと布教を断念する中、最後まで残ったのが初

代であり、明治25年に名称の理をいただいたのが東愛という教会であります。そして、この濃尾地震へのひのきしんの派遣が、天理教の災害救援ひのきしんの最初であったともいわれられておりますので、まさに、私の家の信仰が確固たるものとなったのが災害からであるわけです。そして私は災害隊で出動する度に、よくぞこういった中を布教し、道を繋げてくださったものだと感じ入るのです。

初代には子供がいまませんでしたので養子ももらい、それが2代会長で私の祖父。その子供、つまり父の兄弟は夭折した者もいますが、なんと12人です。子供が続きにくかった家であったとのことですが、ありがたい姿を見せていただいていたのです。しかしながら、それからは順風満帆かというところではありません。私の父は兄弟の真ん中で、昭和17年生まれです。終戦が昭和20年ですから、皆が生まれたのはちょうど戦争前後の混乱期でした。教会は空襲で焼け、親も子供に構う余裕もなかったことでしょう。

父も、幼少期に「両親と過ごした思い出はほとんどない」と申しておりました。夭折した者、幼くして養

子に行った者もおり、兄弟と言っても記憶にない者もいたそうです。

これは我が家だけの特別な話ではないと思いますが、苦勞の道中を通つてくださった方のお陰で今の私たちがあり、ありがたいなあと思えるのです。

ある実験で、まん丸の円と少しだけ欠けた円、この2つを並べると、人間の目線が行くのが欠けた部分だそうです。どちらも同じ曲線の集合に過ぎないのですが、これは人間の習性だそうです。

この習性が、人に対して、あるいは物事を受け取るときにも働き、人はどうしても足りない所、欠けている所に目がいきがちになります。

そうならないためには、意図して「良い箇所」「好ましい部分」を見る癖をつける必要があるというわけです。

欠けている部分はほんの少しです。あとの大部分は問題ないはずですが。

私は元を知るということで、欠けた部分ではなく、足りている部分を見ることができるようになると思っています。

次に、親から子への信仰の伝え方について、二代真柱様と奥様、そし

てお子様達のお話から考えてみたいと思います。

ある日のことでした。何を一生懸命言ったのか忘れましたが、子ども心の小さな正義感にかられて、父にむきになって訴えたことがあります。子ども心に許すことのできない、悪いことに思えたのでしょう。友達が掃除をさぼったのか、先生に嘘をついたのか、ともかく、くどくどと訴えたのです。(中略)

しかし最後まで私の言うことを聞いてくれた父は、静かに言いました。『人には長所もあれば、短所もある。良い所を真似して、悪い所は見ないふりをして通れば良いのだ。人の良い所を取り出して言うように・・・』

これは当たり前のことかもしれませんが、しかし、幼い私の胸には、この言葉は強烈な印象として残りました。(『さんさい』昭和50年12月号)

私は本部の青年としてお仕込みをお願いしたとき、真柱様に直接ご挨拶する機会がありました。そのときに言われたのが、「いろんな先輩がいるけれども、先輩の良いところを真似するように」と静かに言われたことを、このお話を讀むと思い出し

ます。

また、二代真柱様の奥様、せつ様は身上がちであられたのですが、そのやりとりも非常に印象的です。

幼かった頃の三代真柱様が、お宅で飼っていた鶏が卵を産むと、殻に日付を書いて手紙を添え、療養中のお母様のところへ届けてもらっていたそうです。

これはある時お見舞いに行かれたときのお話です。

ふと母の枕元に、日付を記入した卵があるのに気がつきました。

『あ、これ、ぼくの卵だね』

と手をのばして取りあげると、以外にも軽いのです。中がカラッポなのです。不思議なこともあるものだと、思わず母の方を見ると、

『せっかく、善衛ちゃんの方精のこもっている卵ですもの、大切に食べています。でもね、卵を割ると、善衛ちゃんの書いてくれた日付の字が消えてしまうので、小さな穴をあけて、中味だけすうんですよ』

卵の殻さえ愛しむように、私からその卵を受け取りながら、母はそう言いました。

それほどまで私を大切にし、私

に期待してくれた母の思いが、ジーンと私の全身を包んだ感動を、今でも忘れることができません。

(『さんさい』昭和50年6月号)

また、三代真柱様が中学生の頃、ご自身の悩みを病床のせつ様にぶつけたときのお話もございます。

体の弱いこと、人前に出たり立ったりすることが大きらいなこと、しかも、父の後を継いだら、そうせねばならないのに、自分にはとてもつとまりそうにないこと、そんなことをあらいざらい訴えました。

なぜ、こんな家に生まれてきたのだらう、などとも言いました。

そんな私の訴えを母は優しく、じつと聞いてやわらかく受けとめてくれたのです。そして、『そんなもつたいたいことを言うのではありませんよ。少しも不安に考えることはないのです。とにかく親神様にもたれて通れば、何の心配もないのですから』といろいろ言い聞かしてくれたのです。

その頃の母は、ずっと病床にいていました。

『この私でも、寝ながらでも、何かお役にたつことがあるのでお

いてくださるのです。寝ているのも親神さまのなされることで、将来どうなるかと考えたら、居ても立つてもいられません。でもお役にたたんようになったら、引きとってくださる、と思えば、そんな不安も消えます。自分にできることを、させて貰えばいいのです。それをそんな丈夫な体で、なぜそんなもつたいたいことを言うのですか』

その時の、それこそ真剣だったに違いない母のまなざしは、今でもはつきりと私の胸に残っています。(『さんさい』昭和49年3月号)

あの三代真柱様も、我々と変わらぬ悩みを持っておられたということへの親しみと、それを優しく受け止める母親としての姿に、何とも言えない気持ちになります。

ここで言うっておられること、どれも決して難しい内容ではありません。ごく当たり前のことかもしれませんが、真剣にそして句を逃さず伝えることで子供はもちろん、聞く者の心に響くのだと感じます。

もう一つ、教えを伝えるということについて、歌の力について考えて

みたいと思います。

歌の力というのはすごいものでして、小さな頃に覚えた歌、メロディーを大人になってから聞いて、そのときの光景が蘇るといふ体験をされた方も多いと思います。

少年会で出している、「みちのこのうた」という歌集があります。

「おやがみさま」「いのり」「明日に向かって」など、おそらくメロディーを聞けば、おわかりになるものばかりだと思います。

子供たちが御教えを、歌によって自然と身につくようにと考えて作られたのが少年会の「みちのこのうた」です。

本年の少年会の活動方針は、「教祖のひながたを目標に教えを實踐し、子供に信仰のありがたさを伝えよう」でありますが、重点項目の一つとして、「子供に教祖のお話をしよう」を掲げています。

教祖のお話とは絵本や紙芝居を読み聞かせるだけではありません。歌で教祖の親心を伝えることもできると思っています。

婦人会本部出版の『みちのだい』に、「お道の歌によせて」という中山たまよ奥様の連載があります。その中に、

私達が道の子の歌と称しているものは、一体いつ頃からあるのでしょうか。手許に集まった関連本の一冊古くは、当時布教部の中で組まれていた天理教幼年指導委員会が昭和二十四年に発行した『みちのこのうた』で、全20曲がピアノ伴奏付きで掲載されています。(中略)時代を越えた一冊一冊からは、音楽を通してでも道の後継者を育てようと心を尽くされる方々の心意気が伝わってきます。

(みちのだい199号)

とございました。

道の子のうたをみんなで歌うということ、これも立派な縦の伝道であると思います。

次に、こどもおちばがえりについて少しお話をさせていただきます。

本年7月27日から8月6日の日程で、こどもおちばがえりが4年ぶりに開催されます。以前とは規模も形も変わりますが、おちばに帰ってきてくれた子供たちに喜んでらえるよう、現在準備を進めております。

そのこどもおちばがえりは教祖70年祭に向かう昭和28年、次代を担う道の子供たちにもひのきしんの喜び

を味わわせてやりたい、との思いから、布教部、婦人会、青年会が合同で「こどもひのきしん」実施を提唱されたことに始まります。

翌昭和29年、おやさとかた東棟のふしんが着工されます。その年の夏休みの期間を利用して「第一回おちばがえりこどもひのきしん」を開催。10万人を超える帰参者がありました。

これが「こどもおちばがえり」の第一歩。約70年前のことです。

翌年の第二回には早くも鼓笛隊が結成され参加する隊もありました。また、真柱様へのご挨拶に対し、記念の絵葉書がお土産として配られ、これはこどもおちばがえりの真柱様からのおみやげとして続きました。天理プールが竣工したのもこの頃で、夜のプールサイド行事が始まりました。

こどもたちにひのきしんの喜びを味わわせてやりたいとの思いから、長い年月をかけて続けられてきたこどもおちばがえり。その原点は「ひのきしん」にあるわけです。

少年会では、少年ひのきしん隊という活動も長く続けられており、昨年は提唱から50年という節目の年を迎えました。

私は学生担当委員会にいたときに知ったのですが、実は学生会活動の中心となるメンバーの多くが、少年ひのきしん隊の経験者でもありました。幼いときに学生会活動をしている大学生や高校生の姿を見て、自分もやってみようと思う子供も多かったのです。

折しも今月は学修大学の部と高校卒業生コースが賑やかに開催されました。また今月末には春の学生おちばがえりも開催されます。

4月には婦人会総会もございます。少年会、学生会、青年会、婦人はそれぞれ別のもではなく、やはり繋がってこそ意味があるのだとは思っています。

二代真柱様は、少年会の設立当初、将来の理想を次のようにお話し下さいました。

行く行くは、十五歳の連中が、少年団の指導に当たれるように、段々と順繰りに成人を補導してゆくような方法をとりたい。(中略)五十年経って御覧なさい、少年団の訓育は、十五歳の隊長が全部責任を持ってやっておる、青年会の方は、青年会だけのことをやっておればそれでもういいんだ、その

青年会を見做うて、十五歳の隊長が、後を教えて行けるんだというような日もぎつと来ると、私は信じているのであります。

(昭和42年第一回団長講習会)

若い人が自分の力で変わっていきけるような環境や場面を与えてあげる思い切つて若い人に任せてみる。それも私たち育成者のつとめでもあると思うのです。

私が本部青年に入れていただいた頃のことです。当時三代真柱様は朝づとめ後、お散歩をされるのが日課でした。

そのお散歩のお供を私がさせていたただく機会がありました。

そのときはちょうど子どもおぢばがえりの最中でした。

ある詰所の前を通りますと、子供たちがラジオ体操をしていたり、到着して荷物を下ろしている団体があつたりと、朝から賑やかな感じでした。

すると前真柱様は、「あれはどこそこの団体やな。あの教会は少年会を頑張っているんや。あれはどこどこから帰ってきてくれた子らやな。毎年帰ってくれてるなあ」と、いろん

な隊を私に説明して下さるのです。

よくご存知だなあ、なんでこんなに詳しいのかしらと思いました。

そして実に嬉しそうに帰参された方に声をかけられ、請われれば写真と一緒に撮られていました。

私は思いました。こうやって親はおぢばに子供の帰ってくるのを待っていてくださるんだなあ。本当に実に楽しそうな、実に嬉しそうな姿を見て、そう感じたのです。

これは今の真柱様も同じだと思います。

おさしづに、

この所は親里、をやとは深き理、深き理なら心の理を運ばねばならん。口で説いてばかりではをやの理とは言わん。一時の理を以て些かの処運んでくれる処は、十分に受け取る。日々に尽す処、運ぶ処、年々という。(中略)いかなる者も出て来る。出て来たなれば、暑ければ暑かろう寒ければ寒かろうと、満足さすがをやの理。

(明治28年6月23日)

あるいは、別のおさしづにも満足すれば一所やない。世界に映る。不足で行くくすれば、理が消えて了う。何処までも皆々満足

集まって道と言つ。これだけ一寸話して置こう。満足十分さしてやつてくれにやならん。満足の理から芽が吹くで。これをよく聞き分けてくれ。(明治37年2月6日)

運ぶ者も満足、受取る者も満足、小さな運びも大きく受取る、喜びの心を表すことが大切であると、これが親の思召であるということが悟れるお言葉だと思ひます。

今もこれからも、親神様、教祖、そして真柱様が皆様のそして子供たちのおぢばへのお帰りをお待ちくださっているはずですよ。

本年のこともおぢばがえりは、夜のパレードはございません。行事も前のようにたくさんは用意はできません。しかしながら、おぢばがえりの原点であるひのきしんを行い、親の膝下、故郷に帰るといふ喜びを、子どもたちに感じてもらいたいです。

そのためには、皆様方のお力添えが必要不可欠です。

どうか今年の夏のこともおぢばがえりに、多くの少年会員のお帰りを心待ちにする次第です。

二代真柱様は、「子供に信仰を伝えるのは本来、親の仕事であらう」と言

われました。しかし、家庭だけでは足りない部分が出てくるかもしれない。だから、縦の伝道については皆でやるべきであらうと考えられた。

自然にまかせて成人を待つのではなく、みんなの力で世話をさせてもらう。これが少年会の使命だと述べられました。

少年会員は0歳から15歳までで、それ以降は皆、育成会員と呼ばれます。私たち育成会員のつとめは子供に信仰の喜びを伝え、将来立派なようほくへと育つようにつとめることです。

それは子どもがいよいよがいますが、子育ての経験があるうがなからうが関係なく、誰でも携わることができることなのです。

今できることは限られているかもしれない。でも「これしかできない」ではなく「これができる」と素直に喜ぶ育成者でありたいと思うのです。

どうか、先を楽しみに、共に優しい心で道の子どもたちを育てていただきたいというをお願いしまして、私の勤めを終えさせていただきます。

(文責・本島通信編集室)

二月月次祭 祭典役割

二月月次祭祭文

立教百八十六年三月二十二日

献饗長 岡崎八十則
伝 供 篠原不王・吉田晴雄・向所隆文・永島宗行・奥村龍夫・伊東康成・高垣光治・片山直明・茶屋原良昭・横山正次・高島榮造・横関茂治・長尾海和・長瀨充憲・岩橋守行・白垣初生・宮路和徳・岩橋秀一・肥後章・位

下道治・滑川善久・香川勝巳・上野作也・上山康雄・本田政勝・木村大喜
雅楽奉仕者 文岡育則・池田恒治・片山秀明・上山薫・伊東賢太郎・内橋和博・鎌田康典・伊東慎平(順不同)

祭主 指方	大教会長	座りづとめ	てをどり前半	てをどり後半
	西山道教			
地 方	岩橋慶三 西山道教 吉田晴雄	岡崎八十則 高垣光治 茶屋原良昭	伊東康成 横山正次 横関茂治	奥村龍夫 横山富明 山下英久 山口和子 片山美穂 長尾善絵
てをどり	大教会長 片山 勲 高島清弘 會長夫人 片山やすゑ 長尾澄子	老木邦光 原口 実 長尾海和 井上みつの 岡崎むつゑ 高垣洋子	片山直明 篠原不王 永島宗行 高島榮造 長瀨充憲 向所隆文 向所暉美子 岩橋元実 雲庵まち子	木村大喜 鎌田典夫 岩橋守行 宮路和徳 位下道治 吉田知彦 伊東晴美 梅木澄代 横関明美
神殿講話	西正一郎先生(少年会縦の伝道講習会)			

この神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に天理教本島大教会長片山幹太慎んで申し上げます

親神様には一れつ子供の陽気ぐらしをお待ち望み下さる深い親心から、時に臨み旬に応じてだんだんのお仕込みを賜り成人の歩み恙なく日々を結構にお連れ通り下さいます御慈愛の程は誠に有難く勿体ない極みでございます

私共は時旬のをやの思いに添わせて頂けるようたすけ一条の御用に励ませて頂いておりますがその中にも今日の吉き日は当大教会の三月の月次祭を執り行わせて頂く定めの日柄でございますので只今からおつとめ奉仕者一同心を一つに合わせて座りづとめ・てをどりを陽気に勇んで勤めさせて頂きます

御前には今日を榮しみに帰りました本島につながる道の子供達が日頃の御高恩に御礼申し上げ共々におうたを唱和して尚も一筋心にお継りする真実の状をもご覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

更には又教祖百四十年祭に向って現在おらばの理の元に「全教会一斉巡教」が実施されておりますが、私共はこの旬に改めて年祭の元一日のをやの思召をしっかりと心に治め論達第四号の精神を胸に一人ひとりが教祖にお喜び頂けるよう心を定めて三年千日を勇んで歩ませて頂く所存でございます

尚本日は少年会本部より西正一郎先生のご出向を賜り「縦の伝道講習会」を祭典に続いて開催させて頂き時旬のお声に添って親から子供へと道を末代につなぐ努力を家庭といわず教会と

いわず喜びと楽しみで取り組ませて頂きましたと存じます

又今月二十七日から二十八日にかけて「立教百八十六年春の学生おらばがえり」が開催されるに当たりましては高校生、大学生、専門学校生に積極的に声をかけておらばの理に触れ絆を深め合って新たな目標を確かめ合えるよう勧めさせて頂きたいと存じます

更に今月三十一日から四月二日までの間「本島鼓笛隊第九回春奉合宿」を本島詰所を会場に実施させて頂き、二日午前九時南礼拝場南側において一手一つにパレードと御供演奏を実施させて頂く所存でございます

私共一同は教祖のひながたを頼りにおらばにしっかりと心をつなぎ年祭活動を活発に進めさせて頂きますれば親神様には何卒この誠の心をお受け取り下さいますよろづたすけの上には自由の御守護を賜り互に立て合い助け合う陽気ぐらしの世の状にお導き下さいますようお願い申し上げます(原文のまま)

入社祭

(立教186年3月22日)

▼雄福峰△田邊桃佳 ▼鶴峰△尾関 貴信 (計2名)

3月22日(水)

【香川県丸亀市】

天候 曇時々晴
 最低気温 11.8℃
 最高気温 19.2℃
 平均気圧 1013.1 hPa
 平均湿度 87%
 平均風速 1.3 m/s
 日照時間 5.9 時間
 降水量 0.0 mm

本攝分教会 創立100周年記念祭

本攝分教会(片山直明ただあき会長、大阪府柏原市)は、大正12年3月27日に設立した日から始まり、今年100周年を迎える節目の年に当たることから、昨年11月26日に臨時祭典願の理のお許しを頂いておりまし

た。そこで3月19日午前11時より大教会長夫妻を迎え、創立100周年記念祭を執り行いました。参拝者68名。



本攝分教会では教祖年祭に向かう三年千日の第一年目に

「昇のぼり切つて出直しました。故片山肇はしめ本攝分教会前会長様は、このたびの年祭活動が始まる前にお出直しになりました。きつと教祖は、皆さまに『世界に心を向けて、教祖の年祭活動をしつかり歩んでほしい』との思召であろ

うと思ひます」と、年祭活動への思いを示された上で、同教会が掲げるスローガン「つとめ、さづけ、ひのきしん」について「教祖50年のひながたを振り返ると、おつとめをお教えくださったのは後半になります。前半の長い期間は、おつとめを勤めるための心得を教祖みずからお通りに

なりお教えくださったのだと思ひます。教会の神殿はおちばに向かつて建てられています。おつとめを勤める上では、おちばへ祈りを届ける強い思

いで勤めましょう。」続いておさづけについて「おさづけは、教祖に一番近づける行いです。かんろだいを

背に、自分が相手との間に入つて勤めさせて頂きます。取り次ぐ者が教祖の教えに素直に心を沿わせる、心を入れ替えることが必要だと思ひます。」さらにひのきしんについて、「ひのきしんは、言葉通り『日々』の寄進です。てをどりのひのきしんの手はおちばへ勇んで馳せ参じる手であると悟ることができます。おちばへの伏せ込みを意識して勤めま

しょう」と、年祭活動への勤め方を述べられました。続いて座りづとめ・てをどりが陽気に勇んで勤められました。

本攝分教会歴代会長
▼初代会長・長尾幸太郎(大正12年3月27日任命)▼2代会長・藤山春之助(大正12年12月25日任命)
▼3代会長・藤山秀子(昭和37年10月26日任命)▼4代会長・藤山孝治(昭和55年10月26日任命)▼5代会長・片山肇(昭和63年2月26日任命)▼6代会長・片山直明(平成30年4月26日任命)

春季霊祭役割

雅楽奉仕者 池田恒治・片山秀明・上山薫・伊東賢太郎・鎌田康典・伊東慎平(順不同)

祭主	指図方	扨者	賛者	献饌長	伝供	窪田靖明	吉田晴雄	大上道徳	伊東康成	片山直明	昭・横山	榮造・横	尾海和	鎌田典夫	滑川善久
大教会長	西山道教	井上哲	原口実 雲庵春彦	岡崎八十則	岩橋竜造	篠原丕王	永島宗行	奥村龍夫	高垣光治	茶屋原良	高島	長	上野作也	須崎晴道	村田輝夫
てをどり前半	井上哲	永島宗行	大教会長	片山勲	寺本教生	片山美穂	長尾澄子	池田さわみ	平井真治郎	吉田晴雄	岡崎八十則	老木邦光	須崎晴道	長尾海和	須崎晴道
てをどり後半	大上道徳	伊東康成	篠原丕王	横関茂治	鎌田典夫	片山美穂	佐藤道子	宮武有為子	上野作也	須崎晴道	長尾海和	横山正次	須崎晴道	長尾善久	須崎晴道
笛	ちゃんぼん														
拍子木															
太鼓															
すりがね															
小鼓															
琴															
三味線															
胡弓															

慶事

阿部浩介氏(本攝分教会ようぼく)と喜瀬川彩夏さん(平安)

部属富昭分教会ようぼくの結婚式が3月21日、本部教祖殿にて執り行われました。



誕生おめでとう

阿部斗葵くん(令和5年1月3日生まれ、本攝分教会)

岩上航成くん(令和5年1月30日生まれ、赤峰分教会)

大教会人事

(立教186年3月22日付)

布教部 (追加)

委員 文岡邦人

同 宮武有為子

同 茶屋原みち江

【計3名】

本島学生会

委員長 片山元一

副委員長 岡崎一志

委員 中筋あやの

同 片山直道

以上

事情はいつ

立教186年3月、本島関係のお運びはありませんでした。

統計 (2月1日~28日)

教会名	初席	中席	養子	修養料	教人壽	検定講習
本島幸濱	1				1	1
御幸水島	1					
本備前	1	1				
本府中	1	2				
本小倉	1		1			
本吉峰	1		1			
本神豪	1		1			1
大隅聖					1	
別信					1	
新					1	
合	6	8	0	0	1	2

修養科第979期修了

(立教186年3月27日修了)

本陸奥 平井雅次

本陸奥 平井幸子

本水島 山下宗則

本府中 吉田このみ

【計4名】

教人資格講習会修了

(立教186年2月10日付)

本島 横関明美

【計1名】

教会長資格検定合格

(立教186年2月17日付)

御幸濱 後藤正樹

豪峰 出田瑞穂

【計2名】

大教会長動向

▼4月(予定)▲

2日、本島鼓笛隊御供演奏

3日、香川教区役職者会議

8日、本淀分教会巡教

9日、本廣島分教会巡教

10日、本肥分教会巡教

11日、大隅聖峰分教会巡教

14日、大教会月次祭執行

18日、教祖誕生祭参拝

19日、天理教婦人会総会

20日、片山俊次30年祭

(本部相霊殿)

23日、永島精一1年祭

永島タキエ10年祭

24日、修養科総立まなび

25日、かなめ委員会

26日、本部月次祭参拝

27日、かなめ総会

29日、全教一斉ひのきしんデー

30日、宇野晴義主50年祭

宇野和晴主1年祭

以上

をびや許し

(立教186年2月分)

▼本水島△谷裕佳 ▼新信峰

△戸崎真佐実 【計2名】

学生生徒修養会 大学の部

(立教186年3月4日~8日)

▼本千代△今宮穂香 ▼本攝

△片山元一 ▼神峰△黒木直

也 ▼雄福峰△北山妙子△北

山成美 ▼霊峰△宮路広大

▼仙峰△向所あゆみ【計7名】

スタツフ ▼本千代△吉田貴

慶 【計1名】

学修 高校卒業生コース

(立教186年3月10日~12日)

▼崇徳△高垣ひかり ▼大駿

峰△宮川靖代 【計2名】

スタツフ ▼本備前△伊東賢

太郎 ▼本廣△白垣俊生 ▼

栄東峰△川村幸代 【計3名】

ろくち会 (立教186年3月分)

▼本島△片山幹太・片山かおり・

香葉子・幹太郎・好次・昇太△片

山秀明△長尾真実・幸太 ▼樺太

分教会 ▼本樺△天上ほの香・は

る香・太吉 ▼本浜△片山清枝・

正枝・誠 ▼攝泉分教会 ▼崇徳

分教会△高垣あゆみ ▼本高分教

会 ▼本宣道分教会 ▼ポートル

ド△片山和信・陽子・昇慶・竜次

ご芳志に厚くお礼申し上げます

少年会新隊長

(立教186年3月分)

本備前隊 篠原明花里

【計1隊】

本府中隊なりもの練習

本府中分教会(吉田知彦会長、広島市中区)では3月1日、本府中隊少年会活動を実施。なりもの練習を行いました。少年会員2名、育成会員4名。



教会の掲示板第2回「ふしから芽が出る」
本島ドットコムよりダウンロードできます

布教部報告(3月分)

にをいがけ名簿			おさづけ取次報告		
提出：30 教会			提出：27 教会		
総数：358 名			総数：877 回		
樺太	2	本島	2		
本倉岡	3	樺太	2		
本樺	3	本倉岡	3		
本室	3	本樺	3		
渋谷	3	本室	3		
代々木	3	渋谷	3		
本萬代	3	本萬代	3		
本都	3	本京	3		
本京	3	本千代	3		
本千代	3	本平濱	2		
本平濱	1	攝津	2		
攝泉	2	攝泉	2		
琴浦	2	本水島	3		
本備前	3	本備前	3		
本府中	3	本府中	3		
崇徳	3	崇徳	3		
本宣道	3	本宣道	1		
本陽山	3	本陽山	3		
本新田	2	赤峰	3		
赤峰	3	雅峰	1		
雅峰	1	豪峰	2		
豪峰	3	倉峰	3		
倉峰	3	霊峰	3		
雄山	2	仙峰	3		
栄森	2	サザナビック	1		
栄東	3	ハリウッド	1		
霊峰	3	ウイルソン	1		
都峰	1				
仙峰	3				
ハリウッド	1				

にをいがけ名簿リニューアル

にをいがけ名簿とは…

教会で一ヶ月間、にをいがけされた方の名簿を大教会へ報告し、毎月21日(4月は13日)夕づとめ後、ご守護と成人して頂けるようお願いづとめが勤められます。報告のあった教会は本島通信に掲載されます。所定の用紙のほか、スマートフォンからも報告できるようになりました。教祖年祭活動が始まり、日々をいがけ・おたすけを心に置いて勤めさせて頂きましょう。

「にをいがけ名簿」の定義 (どういう人を、にをいがけ名簿に書くの?)

- ① 「私は天理教(教祖のおしえ)を信仰しています」とみずからの信仰を明らかにし、何らかの反応があった相手の名前。
- ② お道の教えを伝えたいけどまだチャンスや勇気がない知り合いの名前。(大教会でのお願いづとめを通して、チャンスや勇気を頂いて実行しよう)

にをいがけ名簿用紙について

- ◇ 所定の報告用紙をA4サイズにしました。(従来のB5サイズファイルも可) 大教会ならびに詰所に所定の用紙を用意しています。
- ◇ 本島ドットコムからも、各自ダウンロードしてプリントすることができます。
<https://www.honjima.com/> トップページ>各種書類ダウンロード
- ◇ 名簿に教会名を記入の上ご提出ください。(所定のクリアフォルダーに入れてご提出、また郵便やファックスでお送りくださってもかまいません)

にをいがけ名簿報告フォーム

スマートフォンから報告できるようになりました。
(報告うっかり忘れないように、にをいがけしたその場から報告できます)

- ◇お一人ずつの入力フォームとなります。送信後すぐ大教会布教部へ報告完了となります。◇大教会布教部で届いた情報は、布教部で一覧表に印刷して、21日お願いづとめにお供えし、にをいがけ名簿集計に差し入れます。◇フォームから入力した情報は、送信者の手元に残りません。各自で記録してください。
- ◇フォームから報告した情報はお返ししません。一覧表が必要な場合は個別に大教会布教部へご相談ください。

〈にをいがけ名簿〉〈おさづけ取次報告〉は今後、「布教部報告」として掲載いたします。布教部では全教会提出(提出教会数の増加)を目指しています。右側の数字はその年の報告回数です。毎月新たに「1」の教会が増えていくことが目標です。なお従来の「にをいがけ人数」は省略し、全体の総数のみ記載することにいたしました。



別席場前シダレザクラ・ライトアップ(3月24日撮影)



←左
にをいがけ名簿
報告フォーム



右→
おさづけ取次
報告フォーム



教会長登殿参列

【登殿参列係】

教祖 140年祭教会長登殿参列について

- 本島大教会の割当月は10回
立教186年5月(15名)、8月(15名)、11月(14名)、立教187年2月(18名)、4月(15名)、6月(18名)、9月(20名)、12月(19名)、立教188年3月(15名)、7月(11名)
- 登殿参列係で各教会長の登殿月を決め、各位通達いたしました。原則として1月1日生まれより誕生日順に組んでおります。
- 該当月に登殿参列が出来ない場合は、一覧を本島詰所に掲示しておりますので、各自で交代の話し合いを行い、決まった後は必ず登殿参列係へお知らせ下さい。交代相手が分からない場合は、係へご相談ください。
- 登殿参列係：平井真治郎役員

婦人会第105回総会

【婦人会本部】

- 日時：4月19日(水)
午前10時30分式典
- 場所：本部中庭および南礼拝場前、東礼拝場前、西境内地ほか
- 人数制限なしでの開催です
- 式典終了後、すぐ詰所講堂にて「ふりかえり」約1時間
- 内容：真柱様メッセージ、婦人会長様ご挨拶を受けて
- ふりかえり参加者にはおにぎりを配布します。

〈教祖誕生祭 おやさまへのお供え〉

- 手作りの品(おふきん、手芸品など)または賄い料
- 4月18日午前7時までに北棟2階婦人会事務局までお届け下さい

<https://www.honjima.com/>

教祖お誕生まつり

【本島大教会】

- 4月14日、大教会祭典終了後、全員で「教祖御誕生讃歌」「おやさまお生まれ」「教祖御誕生祝歌」を斉唱し、お祝いさせていただきます。

青年会ひのきしん隊

【青年会本島分会】

〈GW プチひのきしん隊〉

- 期間：5月4日午前9時集合
5月5日午後3時解散
- 場所：本島詰所
- 内容：ひのきしん、「問いと対話」

〈大教会ツツジ刈りひのきしん〉

- 期間：5月27日(土)午前10時集合
5月28日(日)午後3時解散
- 場所：大教会
- 内容：ツツジ刈り

〈おやさとふしん青年会ひのきしん隊〉

- 日程：6月2日、3日、9日、10日、16日、17日(本島分会として毎週金曜日と土曜日に入隊予定ですが、平日の入隊もできます)
- 場所：宿泊は百母屋

おおうら

大裏地区田植えひのきしん



【伏せ込みひのきしん係】

三年千日おぢば伏せ込みひのきしん

- 内容：大裏地区田植えひのきしん
- 日時：6月24日(土)
午前9時～午後4時
- 送迎：8時30分詰所玄関前より出発
- 場所：大裏地区(天理市豊田町)
- 服装：Tシャツ、短パン(海水パンツ)、サンダル、帽子
※濡れても汚れてもよい服装
- 作業内容：苗の手植え等
- 参加対象：教会長夫婦および希望者
- 補足：ひのきしんは終日を予定していますが、午前のみ、午後のみ参加も可能です。食事(当日の昼食含む)宿泊の予約は各自で詰所へご連絡お願いします。
- 担当者：岡崎八十則・永島宗行



は、本島ドットコムより関連資料をダウンロードすることができます。トップページ>各種ダウンロード

4月ひのきしん派遣依頼

【総務部】

〈本部食堂ひのきしん〉

- 期間：4月1日～15日
- 派遣：本攝①

〈大教会・炊事ひのきしん〉

- 期間：4月13日～14日
- 派遣：本承德①

〈詰所・教祖誕生祭受入ひのきしん〉

- 期間：4月16日午後8時～
4月19日午後1時
- 派遣：本京①、本攝①、本篠①、安藝本中①、本府中①、馬木尾①、本清水①、本宣道①、本九①、赤峰①

〈詰所・炊事ひのきしん〉

- 期間：4月25日～26日
- 派遣：本廣①、赤峰①

大教会4月月次祭ライブ中継

【本島通信編集室】

- 対象：4月14日大教会4月月次祭に帰参できないため、ライブ中継視聴を希望する方
- 申込方法：
メールで、live@honjima.comに「ライブ希望」と「教会名・氏名」を記入してお申し込みください。当日朝ライブ視聴できるアドレスをメールでお知らせします。
- 申込締切：4月13日午後5時まで
- ご注意：ライブ中継は毎月のお申し込みとなります。



肖像写真撮影について

【本島通信編集室】

おつとめ奉仕者の肖像写真撮影について

- 本島通信編集室では、10年に一度、教会長の顔写真を撮影しております。今回は大教会で撮影いたします。
- 日時場所：月次祭(徹饌・閉扉)終了後、参拝場にて(2、3年間をめぐりに毎月実施)
- 対象：おつとめ奉仕者のほか、一般参拝者も撮影します。
- 期間中、何度も撮影いたします。